

## 37 在宅医療継続に関わる因子の前向き研究——総合評価的指標を用いた施設入所要因の分析——

研究代表者名： 中原賢一

共同研究者名： 服部明德、土持英嗣、小川幸代、榎本武郎

施設名： 東京都老人医療センター総合内科

### 目的

疾患に罹患した高齢者は病院へ入院する。改善すると多くは自宅へ退院してゆくが、一部の患者は自宅退院が困難となり、施設へ転院する。

本研究では、自宅から入院して来たが、自宅退院が困難となり、施設へ転院した患者を対象に、施設に行かざるを得なくなった要因を総合評価 (CGA) 的指標を用いて検討した。

### 対象と方法

2001年1月から2002年2月までに東京都老人医療センター総合病棟を退院した連続患者629名のうち、死亡、転科、治療のための転院を除いた65歳以上の患者524名を対象とした。内訳は男性220名、女性304名、平均年齢 $80.1 \pm 7.6$ 歳であった。この中で施設退院は76名(施設群)、自宅退院は448名(自宅群)であった。

この2群において、年齢、性別、基礎疾患、およびCGA的指標である基本的ADL(basic ADL; BADL; 20点満点)、手段的ADL(Instrumental ADL; IADL; 8点満点)、認知機能(Mini-mental state examination; MMSE; 30点満点)、介護者などについて比較検討した。

### 結果

#### 1. 年齢、性、基礎疾患

自宅群の年齢は $79.4 \pm 7.5$ 歳、施設群は $84.1 \pm 7.2$ 歳で施設退群が有意に高齢であった( $p < 0.0001$ )。両群の男女比は、自宅群では男性/女性 = 182/266、施設群では38/38と施設群に男性が多い傾向を示したが、統計的には有意ではなかった( $p = 0.160$ )。

自宅群では循環器疾患を主疾患とするもの(自宅/施設 = 32%/18%;  $p = 0.015$ )が有意に多く、施設群では神経疾患(自宅/施設 = 17%/33%;  $p = 0.001$ )が有意に多く、疾患の分布に差が見られた。その他の種類の疾患については両群に差は見られなかった。

#### 2. CGA 的指標

##### (a) BADL

退院時のBADLは自宅群 $15.5 \pm 6.4$ 点、施設群 $5.9 \pm 6.6$ 点と有意に施設群が低かった( $p < 0.0001$ ) (図)。

入院前のADLからの退院時のADLの落差は自宅群 $-0.80 \pm 3.45$ 点、施設群 $-4.32 \pm 6.1$ 点で、施設群で有意に大きかった( $p < 0.0001$ )。

##### (b) IADL

IADLは自宅群 $4.6 \pm 3.4$ 点、施設群 $0.9 \pm 1.9$ 点と有意に施設群が低かった( $p < 0.0001$ )。ヒ

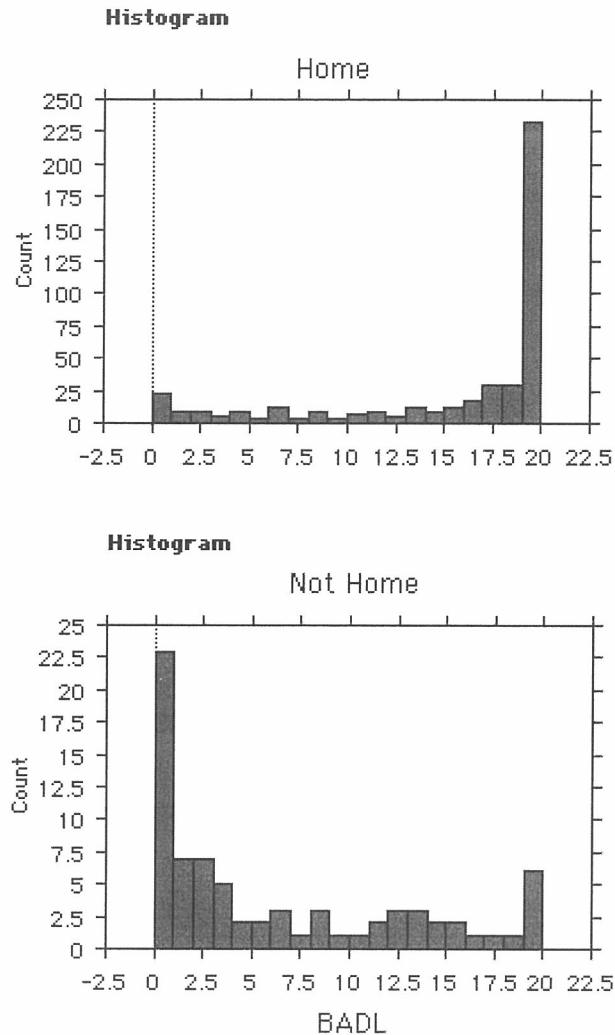


図 1 自宅群と施設群における BADL の分布

ストグラムで見た点数分布は施設群が左上がりを示すのに対し、自宅群では U 字型の分布を示し、違いが認められた(図なし)。

(c) MMSE

MMSE は自宅群  $20.7 \pm 10.9$  点、施設群  $7.1 \pm 10.3$  点と有意に施設群が低かった ( $p < 0.0001$ )。また MMSE は BADL と強い相関を示した ( $r = 0.843$ ,  $p < 0.0001$ ;  $Y = 4.07 + 0.529 * X$ ;  $R^2 = 0.711$ )。

(d) 介護者

全体で見ると、介護者は娘 (31.6%) と配偶者 (30.3%) がほぼ同じ割合であり、次いで嫁 (19%) であった。嫁、配偶者以外の介護者の殆どは患者との血縁者であった。自宅群と施設群では息子が介護者である割合に差が認められ (自宅/施設 = 9.6%/17.0%;  $p = 0.04$ )、施設群で息子が介護者である割合が有意に多かった。

3. 退院先の予測因子

これらの要因のうち何が自宅退院と施設退院を決める決定因子となっているかを検討するために、年齢、BADL、ADL の変化、MMSE、息子が介護者であることを変数としてロジスティック解析を行った。その結果 BADL ( $p = 0.0009$ )、ADL の変化 ( $p = 0.0211$ )、介護者が息子である

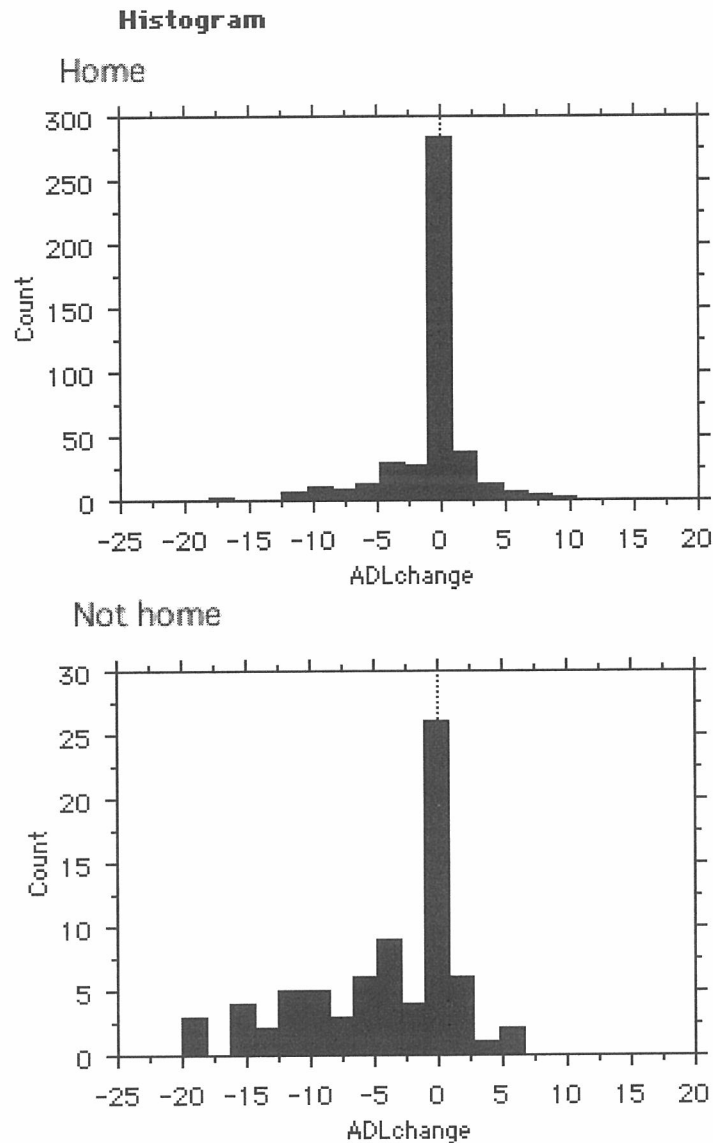


図 2 自宅群と施設群における BADL 入院時と退院時の ADL 変化

こと ( $p = 0.0393$ ) が独立した予測因子であり、年齢 ( $p = 0.217$ ) および MMSE ( $p = 0.363$ ) は独立した予測因子とはならなかった。

## 結論

転院を余儀なくされる要因として、患者の ADL の低さと ADL の低下、および介護者側では、介護者が息子であることが、それぞれ独立した予測因子であった。

本研究では自宅に戻れず転院した患者と、自宅に退院が可能であった患者を比較し、転院せざるをえなかった患者の特徴を明らかにした。転院となる理由は患者側の要因と、介護者側の要因の 2 つがあげられた。

転院となる最も大きい要因は ADL であった。これには ADL が低いという点と、ADL が疾病発症前に比較して低下したという 2 つがあげられた。これらは介護度が大きいか、疾病のために介護度が大き

くなり、介護が破綻したものと考えられる。MMSE は転院患者では有意に低く、また年齢は転院患者で有意に高かったが、ロジスティック解析では共に独立した予測因子とはならなかった。その理由は、この両者が BADL と強い相関を持っているからだと考えられる。

全体を見渡してみると、介護者の殆どは嫁か配偶者か血縁者であり、介護が家族の単位でなされていることがわかる。転院患者の年齢は自宅退院患者より有意に高かった。患者の年齢が高いということは介護者の年齢も高いことを意味しており、介護の破綻(1-3)が起きやすいためと考えられる。また、息子が介護者であることが、転院の独立した予測因子ということが明らかとなった。患者の子供世代のうち、特に男性は介護が不得手というばかりでなく、日中は仕事を持っていることが殆どで、実質的に介護は困難である。在宅での介護はやはり女性が中心であり、女性の手がない環境では、施設入所以外の手段はなくなってしまうと考えられる。

## 文献

- 1) 服部明德, 大内綾子, 渋谷清子, 佐藤和子, 細谷潤子, 中原賢一, 西永正典, 亀田典佳, 土持英嗣, 松下哲, 折茂肇. パーンアウト・スケールを用いた高齢者介護の家族負担度の検討(第2報) 高齢者の問題行動や介護者自身の要因と家族負担度との関連. 日本老年医学会雑誌. 2001;38:360-365.
- 2) 服部明德, 大内綾子, 渋谷清子, 佐藤和子, 細谷潤子, 西永正典, 亀田典佳, 中原賢一, 松下哲, 折茂肇. パーンアウト・スケールを用いた高齢者介護の家族負担度の検討(第2報). 日本老年医学会雑誌. 2001;38:109.
- 3) 亀田典佳, 服部明德, 西永正典, 土持英嗣, 中原賢一, 大内綾子, 松下哲, 金丸和富, 山之内博, 折茂肇. パーンアウト・スケールを用いた高齢者介護の家族負担度の検討(第3報) アルツハイマー型老年痴呆における痴呆問題行動・身体障害度と家族介護負担度の関連. 日本老年医学会雑誌. 2001;38:382-387.